2002-01

札響くらぶ

第19号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

札響英国公演大成功で終了

成長の予感抱いて帰国

札響創立40周年を記念する最大の事業「札響英国公演」は、直前に起こったアメリカの不幸なテロ事件によりその実施が危ぶまれました。しかし、札響は勇気ある決断で公演を実施しました。その英国公演の報告を、㈶札幌交響楽団専務理事の白鳥弘嗣さんにお願いしました。

新年あけましておめでとうございます。財団と事務局一同に代わって、札響に対する昨年の支援活動に感謝申し上げ、札響くらぶの皆様には今年も一層の応援をお願いする次第です。

創立40周年を刻んだ昨年は、記念事業として３年越しで取り組んだ「Japan 2001英国公演」を多くの激励を背に実施でき、新生札響を目指すにふさわしい成果を上げることができました。思わぬ困難も強いられた一大事業でしたが、札響にとってエポックメーキングとなった英国ツアーを振り返ってみます。

公演初日10月24日のスウォンジーは会場 1,100席ながらほぼ満席とあって、楽員は旅の疲れも吹っ飛んだかのような熱演。マエストロ尾高が熟知したホールでもあり、客席からは割れんばかりの拍手とブラボー、床を踏み鳴らす感動的な反応。楽員も終演後のパーティーで、おばさん達から「（楽員）みんなは演奏を楽しんだ？それが私たち一番の喜びなのよ」。これには泣かされました。

25日のクロイドン、28日のベルファストは客席が寂しく、ちょっと落ち込んで到着した29日のバーミンガム公演。そこで、なんと楽屋で迎えていただいたのが札響くらぶの鈴木美保さんと長屋純子さん。テロも空爆も炭疽菌も物ともしない独自の追っかけを敢行したお二人。懐かしいやら眩しいやら……。新たな元気をもらいました。そして 1,800人で埋まった会場は再びの熱気に包まれ、身も心も癒されました。ホール館長からは「演奏も素晴らしいが、不安を乗り越えてツアーを実行した勇気を称えたい」とありがたいお言葉をいただきました。

英国第二の都市・バーミンガムの盛況に気を良くして、いよいよロンドン。集客は不調と聞いていたので覚悟はしていたが、900人近い入りに一安心。お世話になった日本大使館の折田大使、西宮公使はじめ日本人関係者もそろって顔を見せ、２日前からツアーに合流してもらった札響顧問で元理事長北川日出治氏も「楽員も頑張ってくれているようだし、本当に良かった」。もちろん、鈴木、長屋さんもバービカン・コンサートを堪能していただけたと思う。

11月１日のカーディフはマエストロ尾高のホームタウン。「オタカ」を良く知っているだけあって、1,600人聴衆の反応はさすが別格を思わせて温かく熱烈。会場の内外に「Japan 2001」のシンボルフラッグがくまなく掲示され、日本企業も多いウェールズを重視した配慮が伝わってくる。その意味でも、尾高氏と固い絆で結ばれたカーディフの大成功は、英国ツアーの成果を象徴する公演でした。

道民、札幌市民、ファンの善意と後押しで実現できた英国公演は実施直前に降りかかった難題にもかかわらず、楽員、エキストラ一同が家族ともども内なる苦難に耐え、全員が結束して初めて可能になった貴重な経験でもありました。これも財産として札響の新たな伝統に生かされることでしょう。

札響くらぶは札響を愛する人達の札響応援団です

札響英国公演報告記

米国での同時多発テロ、それに続く炭疽菌騒動やアフガン空爆などの事態で、記念すべき札響の英国公演自体、一時は絶望的と見られました。多数の参加申込みがあった同行ツアーも早々と中止が決定されました。そんな中、決然と出発した札響を追いかけて渡英し、札響を応援してこられた鈴木美保さんと長屋純子さんに報告記を寄せていただきました。

この度の緊迫した情勢の中、ツアーが中止になったにもかかわらず、私たちはフリーで英国に渡り、バーミンガムとロンドンの演奏会を聴いてくることができました。

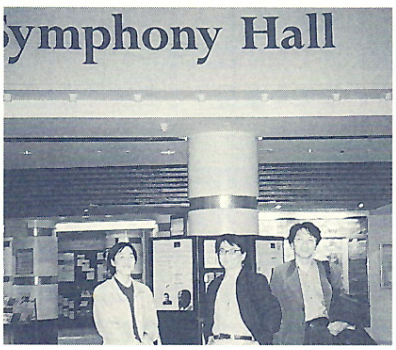
日程的には予定されていたツアーと同期間としたため、少し慌ただしい旅行ではありましたが、心配されたような事件も何もなく、初めての英国を札響とともに訪れるという、生涯の中でも忘れることのできない出来事になりました。

出発前から、新聞の報道で、札響が千歳を無事出発、スウォンジーの公演が大成功を収める、などと確認できていたので、私たちも10月27日の午後2時にアムステルダム経由ロンドン行き空路へは安心して搭乗しました。空港でも、到着後も、特に物々しい雰囲気はなく、翌日は完全な観光気分にひたれました。

さて、10月29日バーミンガム公演の当日、ロンドンからは急行で1時間40分程度の鉄道の旅。車内は1・2等とも向かい合った座席に大きなテーブルがあり、食事には便利でした。

駅に降り立つと、高速道路が行く手を横切り、予想外の大都会の様相に少し戸惑いながら何とかホテルへ到着。会場のシンフォニーホールへは歩いて5分くらいの所でした。ホールは国際コンベンションセンターの中に位置し、近代的なガラス張りの建物で、10周年記念の表示が掲げられていました。

中を見学していると、道新の田中記者と新聞評でおなじみの三浦先生が連れ立って登場。「札幌からの“追っかけ”はこの四人だけのようです」などと話され、日本人と出会えたことでホッと一息ついたものです。



ホールのエントランスで三浦・田中両氏と

そして、ここでやっと当日券を購入。中央、前から5列目で料金は23.5ポンド。中では一番高価なチケットだったでしょうか。それでも、4千円強というところです。

札響の先発メンバーはもう到着しているとの情報により、会場から歩いて5分弱のホテル“ジュリスイン”へ。さっそく散歩に出ようとしている懐かしい面々と遭遇。札響くらぶの交流会、インタビューなどで顔なじみとなっている方は、やはりこちらに気づいて驚いている様子。でも皆さん一様に喜んでくださるので、辺り構わず、写真を撮らせてもらいました。館内で唯一喫煙場所になっているというロビーのソファーで少し歓談した後、そろそろ時間だからと会場へ同行。楽屋へも何気なく潜入してしまいました。そこで出会った札響事務局の方にも特に咎められることもなく、「今日まで問題もなく順調に公演が終了してきている」と満足げな表情をされていました。

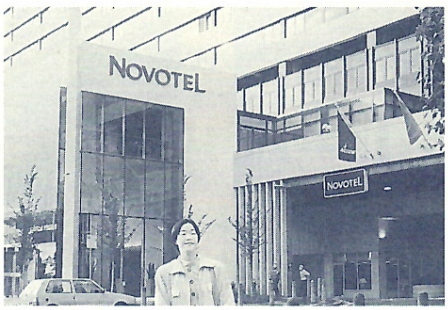
ホールではゲネプロ前のため、楽員は各自ばらばらに好きな場所で曲をさらっています。座席に座って眺めていると、やはり写真を撮りにくる人もいたりして、楽員も旅行中なのは同じかな、とほほ笑ましく思いました。このホールの定員は2,200人とのこと。オペラの歌劇場のように左右は垂直で4階建てになっています。今回の演奏会場中、最も評判のよいホールということにもうなずけます。

ステージで

開演間近にロビーに出ると、いかにもクラシック好きらしい落ち着いた雰囲気の、銀髪の高齢の方が目立っていました。演奏が始まり、ほぼ埋め尽くされた客席からは曲が終わるごとに大きな拍手と歓声があがります。札響に好感をもち、演奏を心から楽しんでいる様子が伝わってきます。私たちも心地よい充実した気分でホテルへの帰途につきました。

翌日、札響メンバーは専用バス３台でロンドンへ移動とのこと。私たちはバーミンガム美術館を見学後、往路と同じ鉄道（往復切符が割安です）で戻りました。

ロンドンでは事前に確認してあったため、私たちもメンバーと同じ“ノボテル・ロンドン・ウエスト”に宿泊します。チェックインすべくホテルに向かいましたが、メンバーは会場へ直行していました。



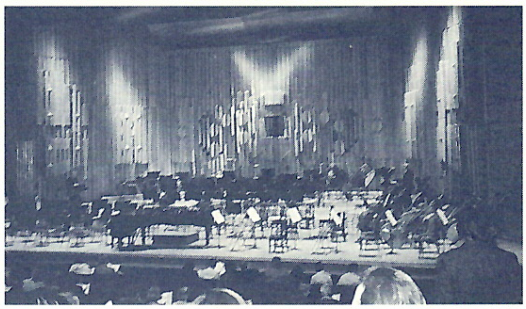
ノボテル・ロンドン・ウエスト

ピカデリーをぶらぶら散策後（ここでアフタヌーンティーの予定でしたが、買物にうつつを抜かしているうちに実行できなくなり、無念）、会場のバービカンセンターへ向かう。ここは一帯が総合文化センターになっていて巨大なコンクリート建築群がそびえる、近代的で人工的な地域です。

ロンドンではさすがに前日のバーミンガムとは違い、ホールで日本人をけっこう見かけます。年齢も幅広い人達が聴きに来ているようです。私たち以外にも札幌から来ている人がいるのでは、と考えてしまいます。

英国で今回行われる７公演のうち、ロンドンは５番目。ベルファスト、バーミンガム、ロンドンと連日、飛行機・バスで移動、直接会場でリハーサルに入り本番、という日程の三日目です。

白鳥専務のご厚意で、楽屋へ招待券をいただきに行きました。コンサートホール入口とは別の入口でガードマンにしっかりチェックされて、エレベーターで舞台裏に到着。緊張気味の楽団員の皆さんを横目に、吉田事務局次長よりチケットを受け取り、コンサート会場に急ぐ。



開演直前の会場

ステージには、ＢＢＣのカメラが３台、正面に１台、客席に３台と計７台が据えられ、演奏が始まった。昨夜のバーミンガムのコンサドーレ風応援とは異なり、静まりかえった会場。札幌の定期演奏会を彷彿とさせたが、演奏終了後は拍手が鳴りやまず。指揮者尾高氏は何度もステージに呼び戻された。彼は最後にジャンプ選手のテレマーク入りフィニッシュスタイルで去り、思わず会場から温かい笑い声が上がる。

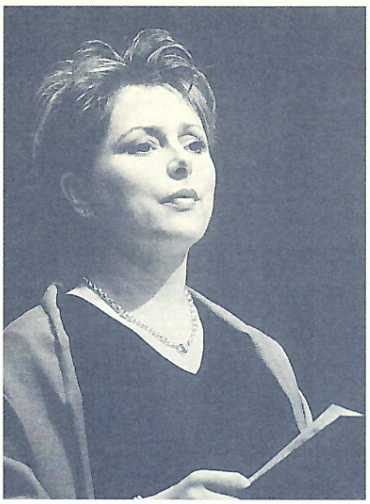
快い気分で地下鉄駅ホームへ。５・６人の楽員がやって来て、明日はカーディフへの移動のみ、今夜は大いに楽しむようです。

ホテルに戻ると、カフェで楽員の方々に呼び止められ、翌朝の早立ちも忘れ、午前１時過ぎまで話し込む。二人でロンドンまで来た甲斐ありと、大いに盛り上がる。

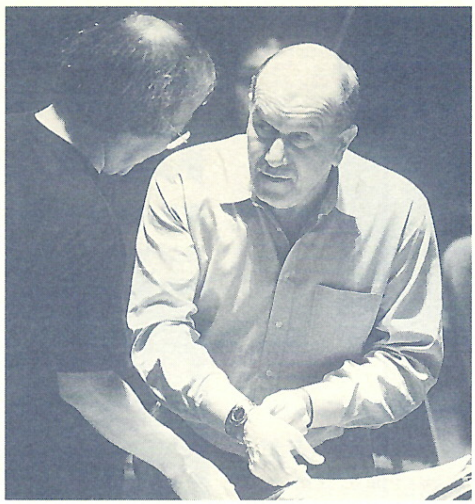
31日、ヒースロー発の便は１時間遅れ。乗り継ぎのスキポール空港で乗り換え、慌ただしく千歳へと向かう。すっかり冷蔵庫の中に入ってしまったようなロシア上空を飛んで、私たち二人の札響イギリスツアーは終了しました。

（鈴木美保・長屋純子）

英国公演スケッチ



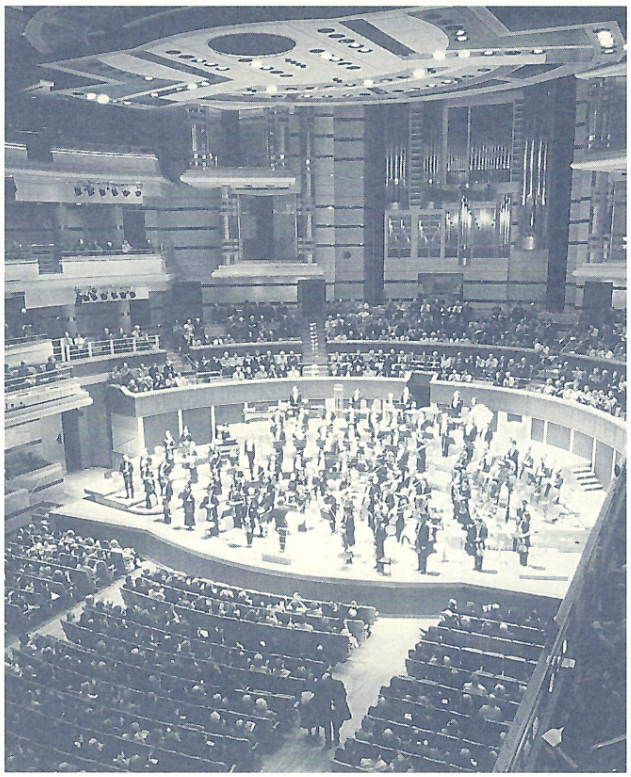
ソプラノ＝レベッカ・エヴァンス
(Photo:Keith Saunders)



リハーサルでの打合せ
(Photo:Adrian Burrows)

ピアノ＝ジョン・リル
(Photo:Keith Saunders)

移動途中で



大好評だったバーミンガム公演
(Photo:Adrian Burrows)

客席でも練習
(Photo:Keith Saunders)

移動の車内

移動の機内

カーディフのホテル

移動中の小休止

ホテルでの食事

(写真提供：札幌交響楽団)

札響物語　XIX

海　外　公　演　②

1975年６月に行われた初の海外公演は、アメリカとドイツの姉妹都市巡りでした。アメリカの姉妹都市ポートランド・オレゴンでの公演終了後、パン・アメリカン航空のチャーター機でアイルランドのシャノン空港経由でミュンヘン空港へ行きました。

給油のために立ち寄ったシャノン空港は、近くに川があるのか一面に靄が立ち込め、靄の下には草原が広がっていました。

ミュンヘン空港では1972年に開催されたオリンピックの時、選手団が乗った航空機をテロが攻撃する事件があり、札響の到着時も警戒は厳重を極めました。機が止まると同時に、ジープとトラックが走ってきて、一団の武装兵が周りを固めました。

一行はタラップに横付けされたバスに乗り、そのまま格納庫のような場所に向かい、その場でしばらく待たされました。

私は、近くに来た空港職員をつかまえて「皆疲れているので、早く入国手続きをして欲しいのですが」と頼んだのですが、「皆さんは親善使節団なのでその必要はありません。荷物が降ろされたら、そのままホテルへ向かっていただきます」と言われました。

間もなくバスは動き出し、小一時間で宿舎のペンタ・ホテルに到着しました。従って、我々のパスポートにはドイツへ入国した痕跡が残されていなかったのです。

ビールの本場ミュンヘンには、数千人が入れるという有名なビアホール、ホッホブロイハウスがあります。ホテルに荷物を置くやいなや、出掛けた人も多かったようです。

人懐っこいミュンヘンの人は、姉妹都市のオーケストラ札響に特別の近親感を持っていて、英語も話せないはずの楽団員がビアホールでたまたま隣同士になった人の案内で観光に歩いたと聞かされ、オーケストラによる姉妹都市交流の意義の深さを改めて感じたりしました。

また、ザルツブルグまでわずか一時間足らずの距離なので、国の違いも忘れて、ふらりと列車に乗って行き、パスポート不携帯で、夜中に国境警察から身元確認の電話が来たりもしました。

ミュンヘンの演奏会場は、バイエルン放送交響楽団の本拠地ヘラクレス・ザールでした。駐車場にあった「マエストロ・クーベリックの場所。他の人は使用しないように」との看板が印象的でした。

このホールは、かつてバイエルン国王の王宮だった建物の中にあり、ヘラクレス・ザールは「謁見の間」だったのです。1,300人程が入れるホールの内装はすべて大理石のため、残響調整の目的で壁一面の大きな緞通が数枚かけられていました。

客席はお粗末な木製のベンチでした。何年か前に、近代的なホール椅子に取り替えたところ音が悪くなったため、元通り木製ベンチにやり直したそうです。

ステージ練習での第一声は、信じられない程柔らかい豊かな温かい響きがし、団員は思わずお互い顔を見合わせたほどでした。

札響は温かい素晴らしい響きも味方にして、南ドイツ新聞から「今週の星」に選ばれる名演をしました。これをバイエルン放送が録音し、ドイツでも放送されたようですが、帰国して間もなくＮＨＫ・ＦＭで放送になりました。放送の翌日から「あれは本当に札響の演奏だったのですか」との問い合わせ電話が、日本中からかかってきました。

かけてきた中の一人が、現在は在京新聞社の腕の立つ音楽担当記者になっていました。当時は高校生だったそうで「とても素晴らしく、日本のオーケストラと思えなかったので思わず電話を」と述懐していました。

（竹津宜男）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　首席コントラバス奏者

藤澤（ふじさわ） 光雄（みつお） さん

英国公演お疲れ様でした　いかがでしたか

外国だから、という特別の気負いはありませんでした。ツアーではシベリウスとマーラーのシンフォニーを中心にした二つのプログラムでしたが、オーケストラにも自分にとっても大変よい経験になったと思います。といいますのは、同じプログラムを何回か連続的に演奏しますと、曲の細部に新しい発見があったり、演奏に変化があったり、進歩もあるわけなので。

今回は各地で暖かい声援をいただき、勇気を与えられました。ツアーを通して得た経験はすぐに結果がでないにしても、今後に生かしていけるものと思っています。

札響への入団は？

私は秋田生まれの北海道育ちです。札響入団は、1965年７月ですので、36年の在籍ですが、74年から２年間はウィーンに留学しています。

そうしますと　札響のこれまで４回の海外公演にすべて参加していらっしゃるわけですね

はい。最初のツアーは、75年の札幌の姉妹都市を結ぶ３市（米ポートランド、独ミュンヘン、ガルミッシュパルテンキルヘン）でした。その時は留学先のウィーンからポートランドで合流して参加しました。荒谷さんに次いで、シュバルツさんが培った基盤が大飛躍する集大成のツアーだったと思います。

特に印象的だったのは、ミュンヘンのヘラクレスザールでの響き。フォルテもピアノもピアニッシモも演奏者の匙加減をそのまま鮮明に響かせるホールの造りに驚きましたね。それまで経験のないことでしたから。

コントラバスとの出会いや留学についてお話しいただけませんか

最初の手ほどきは札響で首席奏者だった林雄一さんでした。故・長汐寿治さんにも師事し、留学したウィーン国立大学ではルートヴィッヒ・シュトライヒャーに師事しました。

ウィーンで学んだことは……技術の向上も勿論重要ですが、音楽に対して感性をみがくことの大切さを教えられたことですね。私にとっては、見るもの聞くものすべて貴重な体験だったと思いますが。

大きな楽器で大変ですね　特に気を使うところは？

コントラバスは大きくて重い上、外気に影響受けやすくて破損しやすい。オーケストラではスタッフが運んでくれますが、会場に着いたら先ず楽器にごきげんを伺います。

演奏ではオーケストラを低音で支えるというだけでなく、全体と一体となってサウンドや色合いを整えてゆくことが大切だと思っています。目立たないところにも神経が行き届いていることが、オーケストラの力量のバロメーターになっている、とも言われていますからね。

これから先　おやりになりたいことは？

とにかく合奏が好きなので、室内楽にも力を入れていきたいです。また、ソロなども機会があればとりあげ、地道に自分を磨いていきたいと思います。

札響ファンのみなさんへひとこと

聴いて下さる皆さんの声は、励みになります。演奏会の後など、気軽に声をかけて下さい。

（インタビュアー　鈴木美保・渡辺悦子）

札幌交響楽団　ファゴット奏者

夏山（なつやま） 朋子（ともこ） さん

ＮＨＫ総合テレビ朝のホームドラマで高校生がファゴットを吹いていましたが…

そうですネ。あのテレビを見て、ファゴットに興味を覚えて、ファゴットのファンが増えると嬉しいですネ。私は大阪生まれで、中・高校は、ブラスが盛んな学校で、奈良県のコンクールで優勝しておりました。そんな関係で、トロンボーンを始めましたが、間もなくチューバを吹くようになりました。このときの指導者が音楽の感覚を教えて下さり、指揮棒の振り方で音楽が変わることを体感し、音楽の素晴らしさを知りました。高校に入ってもチューバを吹いていましたが、２年の秋にファゴットを始めました。大阪音大を受験しましたが、受験前には曲らしい曲は１・２曲と音階ぐらいしか吹けなかったのでとても大変でした。けれど、ファゴットを希望する人は少ないので合格してしまったのです(笑)。大学を卒業すると、教授に引っ張って頂き、母校の非常勤教育助手を勤めました。２年間勤めた後、ドイツのトロッシンゲン国立音大に留学し、一昨年７月に卒業しました。留学したきっかけとなったのが、小山昭雄教授との出会いでした。人情厚く、男気のある、厳しく優しい先生に初めて出会ったときに(大学２年)“私は何があってもこの人についていくんだ！”とビビビッとアンテナが働いたのです。親のように私のことをよく理解し、道をつけて下さった人でした。その情熱に、私たち学生はみんな巻き込まれていました。在学中、シュトゥットガルト室内管弦楽団や南西ドイツ・フィルハーモニーコンスタンツの常任エキストラ奏者として経験を積むことができ、とても幸せでした。

ドイツのポツダムでの国際ファゴット・カルテット・コンクールで受賞しましたね

はい。留学して２年目の98年で、第２位でした。それで、日本各地で、受賞記念演奏会を開催しました。３人の仲間と、１年間かけて、このコンクールのために、本当にたくさん練習しました。忘れられない思い出です。

小さいときは何になりたかったのですか

動物が好きなので、動物園の飼育係になりたかったです。

ファゴット奏者にならなかったら　何をしようと思いましたか

彫刻家。それも日本工芸で、和室の欄間を飾る木彫です。現実とすごいギャップがあるでしょう。どしうしてそんなことを考えたのか、自分でも分からないのです(大笑)。

北海道や札幌の印象は

風は強いが、寒い所が好きですから冬は苦にならないし、札幌は過ごし易くいい街です。

ご家族と離れていて淋しくないですか

大阪に両親と弟が一人いますが、父は会社を経営しており、弟は父の会社に勤めています。11月の定期の時に家族が札幌に来てくれました。でも、仕事が忙しいし、仕事が楽しいので、あまり淋しいなどと感じる暇もありません。(エライ!!)

休日は何をして過ごしますか　また　趣味は

趣味とは言えないのですが、掃除が好きで、休日は家の中を掃除しています。髪一本落ちていても嫌なので、目玉をギョロギョロさせています(笑)。

札響入団のいきさつは　札響の印象は

ドイツにいる時から、心の底からどうしてもオーケストラに入りたい、と思っていました。早く一人で自活したかったのです。ちょうど、札響が募集しているというので応募したところ、幸い採用されました。札響は、皆さん音楽にとても真摯に取り組んでおりますし、親切にして下さり、よいオケに入ったと喜んでいます。オケに入れなかったら、またドイツに行って勉強しようと考えていたのに、こんなに居心地が良いので当分ドイツには行けません。

好きな曲は

モーツァルトのファゴット協奏曲変ロ長調Ｋ191です。聴くより、吹く方が楽しいですね。

札響くらぶに一言

札響くらぶという応援団があることは、団員には幸せですね。ご期待に添うよう頑張ります。よろしくご声援下さい。

（インタビュアー　石川政治・細川馨）

from 「札響くらぶ」

第４回札響くらぶコンサートのご案内

～今年は　今人気の指揮者　*飯森範親さん*　登場～

毎回ご好評をいただいております、札響くらぶコンサートも、今年で４回目となります。今回は指揮とお話に、今、若手指揮者人気 No.1 の飯森範親さんを迎え、次の内容でお贈りします。

皆様お誘い合わせの上、多数ご来場下さいますよう、実行委員一同お待ち申し上げます。

プログラム

第１部　ビゼー／歌劇「カルメン」　第１・第２組曲より
　　ベートーヴェン／交響曲第５番「運命」～指揮者にチャレンジ～

第２部　ベートーヴェン／交響曲第６番「田園」（リクエスト No.1）

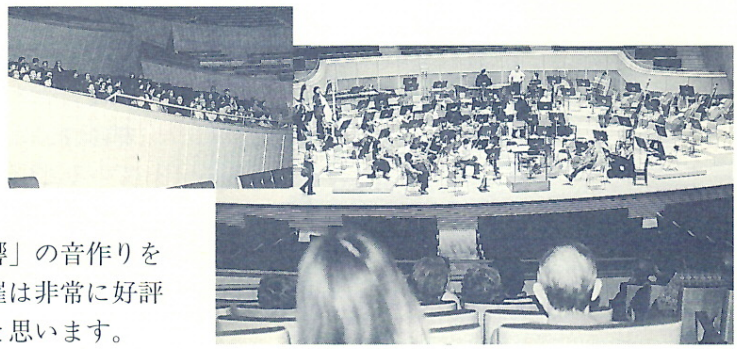
指揮とお話　飯森　範親
管　弦　楽　札幌交響楽団

日　時　平成14年４月27日（土）午後５時開演（４時30分開場）
場　所　札幌コンサートホール Kitara 大ホール
入場料　一般 2500円　高校生以下 500円
取扱所　大丸プレイガイド・キタラチケットセンター・札響チケットサービス
　　お問い合わせは札響チケットサービス（Tel 011－520－1780）へ

☆チケットの一般販売開始は２月15日の予定です。会員先行予約は、郵便でご案内します。

今年度の練習見学会開催

前号でお知らせしましたが、今年度の練習見学会は、昨年10月11日、英国公演記念公演のリハーサルをキタラで見学しました。当日は101名の会員の参加があり、皆さん熱心に「尾高・札響」の音作りを見学していました。キタラでの開催は非常に好評で、今後も実現していきたいものと思います。



編集後記

あけましておめでとうございます。

今号は、英国公演の特集といたしました。実現が危ぶまれた英国公演も無事終了し、何よりでした。

次号は、第４回札響くらぶコンサートの特集になりますので、予定よりも１か月遅れての発行になります。ご了承下さい。

次号で「札響くらぶ」も記念すべき20号となります。今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。　（佐藤良次）

次号の「札響くらぶ」は５月発行の予定です。